

真・恋姫†無双～世界 の変革者達～

レイ4886

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

不幸な事故によつてその命を絶たれた二人の転生者

二人は対極ともいえるほどの能力をそれぞれ手に入れて新たな世界へと旅立つ
一人は表の世界で圧倒的な武を振るう

もう一人は裏の世界で影ながら暗躍をする

その二人が交わる時、どのような物語が紡がれるのであろうか

目

次

表章
裏章

一話
始まり

18 7 1

表章 プロローグ

「どこだ……ここ……？」

俺は、見渡す限り何も無い空間で目が覚めた。上下左右前後東西南北など三十二方位全てが白く、白く、白い、どこまでも真っ白な空間でだ。

「あれ、俺、何してたんだつけ……夢か……？」

「お主は死んだんじやよ」

「!?」

驚いた。いきなり白髪で立派な白髭を持ち、それっぽいような杖を持っているいかにも神様っぽい老人が目の前に現れた。つーかもう白は飽きたよ。

「まあそう言うな、自分の身体は普通にみえるじやろ」

確かにそう言われてみればそうだな、だがまあそんなことはどうでもいい。

「俺は……ああそうか、死んだのか」

「随分と物分かりがよいのぉ、普通は取り乱すくらいのことはすると思うがな。そういうやつは嫌いではないぞ」

そりやあ生前が生前だつたしなあ、嫌でも状況判断や臨機応変な対応つてやつを覚え

させられるよ……でもその結果がこの歳での死かあ……まあ因果応報つてやつかな……
しかしおかしいぞ、冷静に思い出してみるとあれだ、俺は確かトラックに轢かれたはずなんだが……なんでいま五体満足でここにいるんだ？ 常識的に身体はバラバラになるだろ。

「そこはほら、神の力というやつじや」

神すげえな。しかしそうか、こいつは心がわかるのか。それは対話が楽だな。

「搖るがんの、そんな奴は今のところ始めてじや。大抵のやつは泣き叫ぶめんどくさいやつが狂喜乱舞して急かすようなやつばかりじやつたし。そういえばそうじや、お主、生まれ変われるぞ」

「はい？」

思わず声に出てしまつた。とはいえたんでだ？ 俺はもう死んだはずじやないのか？

「そこはほれ、大人の事情というやつじやよ。察してくれ」

「お、おう……まあ生き返れるのならなんでもいいや。ほんでどの世界だ？ まさかまた人生始めからやり直しか？」

それはできればごめんこうむりたい。今度の人生ではなんとか普通に暮らしてえな、またこれまでの生活とか真つ平御免だ

「そういうわけではない、お主が行くのは三国志の世界じや。せいぜい群雄割拠の時代を生き延びてくれ」

「まじかよ……なんで戦が日常茶飯事のように行われているような時代に行かなきやらねえんだよ」

「それはわしの趣味じや、まあ心配するな。なんでも二つだけ願いを叶えてやろう、それがわしからの餞別じや」

「趣味かよ……とはいへ二つかあ……とりあえず例を聞いてみるか

「これまでどんな願いを叶えてきたんだ？」

「そうじやのお、例えば破壊を司る程度の ability や無限の魔力、テレポートなど様々な注文を叶えてきたぞ」

「うわあ、見事に人外の能力ばつかだな

「んー、じやあ三国志の世界だしどりあえず武力は欲しいなあ……んー、じやあ武力チートと戦闘中でのみ働く直感チートかなあ……」

「お主も時代的にはそこまで変わらんくらいの力を望んだの、ちなみに理由を聞いてもよいか?」

「理由ねえ……」

「前者の理由だがとりあえず戦に巻き込まれて野たれ死になんてことにはなりたくない

からな、後者は軍師泣かせにはなりたくないが感覚は大事だ、ものすごく」

「ほう、まあそういう考え方もあるかの。そうじや、転生者が己の強化を願いに頼むやつには聞いておく決まりなんじやが、お主はバクチ制度をするかの？」

「バクチ制度？ なんだそりや？」

「バクチ制度というのはな、例えばお主の願いのように武力チートや政略チートなどにはわしらには上げることのできる上限というものがあるんじやよ」

まあ地球を破壊できる力とか人間に耐えれる限界とかあるしな

「流石にそんなものは無理じやがバクチ制度では転生時点ではその力を手に入れないが、生活の途中で己の全てが変わるほどの衝撃を受けたらその望んだ能力をわしらの上限よりも遙かに高い力で手に入れることのできるというものじやよ」

つまり平凡な人生だつたら頼んだ力は手に入れずに普通の人生だが、どつかで条件を満たしたらものすごい凄い力が手に入るつてことか

「まあそんな感じじや、ちなみに条件は人によるぞ……それでするか？ センのか？」

文字通りのバクチだな、すぐ就得るか、いつか何倍かで得るかつてとこが

普通の人生なら能力なんてなくていいな、戦とかに巻き込まれないんだつたらそれが一番幸せだろ、自称神

「自称じやなくて実際神なんじやがな…わかつたぞ、では最後にひとつ、まずこの中から

一枚選んでくれ」

「そう言つて神はトランプのエースからキングのカードを一枚ずつ、計十三枚出してきた。

「ん？ 十三つっていうと…」

「その通り、まあお主の生まれる場所を決めるだけのことじゃよ」

「そうか、でも南蛮とか入れたら州の数なんていくらでも変わるものがあれどもいいな……ほいと。」

「四……か、嫌な予感しかしねえな…」

「まあそう言うな、次はこの中から三枚ほど選ぶがよい」

「次に神は五十枚ほどの紙の束を取り出してきた。

「多いな…まあ三枚か。これとこれとこれだな」

「その三枚か…なかなか乙なものを選んだの」

「正直言うとどうでもいい、というか何の紙なんだよそれ。

「それは秘密じや、その方が楽しみじやろう」「

「まあ否定はしねえよ、どうせすぐわかることだろうし…これで全て終わりか？」

「ああそうじや、チューートリアルは全て終わつたぞ」

「んなゲームみたいに…まあもう会うことねえ。これでさよならだ」

「そうじやの、もうすぐ時間も来ることじやし。それではお前の人生、楽しみにしておくぞ」

「そういうことかよ…まあせいぜい世直しくらいのことはしてやるよ、首洗つて待つな」

そう言うと俺は、今度は視界が真っ暗闇になつた。

もうわしと会うことは無いんじやが…という神の声がだんだん小さくなつていく。

ああ、今から俺はあの三国志の世界に行くのか。三国志は生前なかなか好きだつたら大体のあらすじはわかるな。とりあえず生き残ることを第一に考えておこう。でももし、三国での戦いとかに巻き込まれたりしたら……

「世界を……変えてやる……」

裏章 プロローグ

周りが何も見えない黒洞々たる空間
上下左右を見渡してみてもどこまで続いているかわからないような奥行きをほこる
闇の中

目が覚めたオレは、そのような場所に立っていた
いや、もしかしたら宙に浮いていたのかもしれない

暗黒で自分の状態を明確化できないから今の自分の状態さえわかり得ない
ともかく、そこに存在していた…と言つておけば間違はないだろう

「ここは…？」

若干、掠れたような声でオレはそう言つた

オレの記憶の中にはこのような空間に見覚えはない、ましてや、このような空間を俺
は知らない…

ここはどこなのだろうか、という感情が昂り始め記憶に見落としでもあつたのか？オ
レが記憶の中を模索しようとする

すると…

「貴様が來たことがない：といつても無理はないだろう

ここは輪廻転生の輪に導かれしものが來るような場所ではないのだから…」

急に目の前に、金髪の青年が現れた

何處と無く神々しいオーラを放ち、その口調にも一句一句に霸氣がある

さらに先ほどの発言から、こいつは人の心中を読むことができるらしい…

害意を持つて接してきているわけではないみたいだが…
どうするべきか

暫く返答を躊躇しながらそう考えていると

「ほう、常人には見えぬはずの我が見えるか…それに我を目の前にしても冷静に考察で
きるその分析力と考察力…賞賛に値する」

なぜか賞賛された

そのことに嬉しくないわけではないが今必要なのはそのようなことではない

ここで必要なのは情報、ここがどこなのか？こいつは誰なのか？

言葉からしてこいつはこの空間を知っている

恐らく、輪廻転生という言葉から導かれる通りだと何かしらの事象でオレは死んでし
まつたのだろう

あくまで推測の範疇だが

それならば、こここの空間を知るこいつに聞きだせる分だけ聞き出しておいても損はないだろう

「我的賞賛を無視するか：まあよい

貴様が欲しがつてゐる情報を一つひとつ答えることにしてやろう：
 ここは、冥界と顕界の狭間、所謂現世とあの世をつなぐ場だ。先ほども言つたが、輪廻転生を巡るもののが来るような場所ではない：

では、何故貴様がこのようなどころにいるのかというと…」

そう言つたところで青年は一呼吸おき、それから一言

「すまん！」

と言つた

「…？」

その謝罪に対し意味がわからず、反応に戸惑つていると

「先ほど貴様は、死んでしまつたといつたな、だが貴様が死んだのは我的ミスだ！」

ほんの些細なミスから、寿命が有り余る人間を殺してしまうとは…」

些細なミス、寿命が有り余る人間： その発言に違和感を持ち、こいつという存在

が一体なんなのか？ とことん気になり始めた…

そこで俺は一つの質問をすることに

お前は…何だ？

「済まない、自己紹介を忘れていた

我は…貴様らの世界…我らは顕界と読んでおるが
そこで信仰されているまあ所謂

神と呼ばれる種族のものだ

とはいっても、我はまだ中級神なので神力はあまり持ち合わせていないのだがな…」
あえて誰だではなく何だ？と聞いた

そこには、お前という存在は一体何者なのかという意味合いがあつたのだがなんとか
答えてくれたみたいだ

さて、こいつが神…とすると先ほどの言葉も領ける
人を造像し、管理している存在なんだ

そんなミスで人を殺してしまうのもあり得るのかもしれない
こちとらはた迷惑でしかないのだが…

「それでは、これから貴様が行うべき行動を説明するぞ」

ちなみに聞いておくが：現世に帰るという手段は

「済まないが不可能だ…、いくら神とはいえど、魂の抜けた骸に既に抜けてしまった魂魄を吹き込むのは不可能だ…」

申し訳なさそうに神がそう言う

まあ、ここまでは正直予想できた

そもそもその質問も結構な希望論を込めたようなものだ

元からあまり期待はしていない

「従つて貴様には残りの寿命を消費してもらうため、異世界にて残りの人生を謳歌してもらうことになる

この期間が終われば、貴様もまた輪廻転生の輪に戻ることも可能であろう

まあ、まだ推測でしかものを言えないというのは歯痒いが…」

いかにももどかしいと言わんばかりの表情でそういう神

それに対しても苦笑していると、ふと一つの疑問が浮かんだ

容姿や記憶はどうなるんだ？

「引き継がれるよ、あくまでこれは人生の続きなんだから

ただ、あくまで現世の顕界と貴様を引き離してしまったのは我のミスだ

そこで、貴様には二つだけだが能力を付加させてやる上級神なら3つやることもできるんだが：

まあ、これも貴様の運命だと思つてくれ」

自嘲気味にそういう神を横目に考える

ここまではある程度定石通り：だが能力の付加というのは想定外だな

これはどうするべきか：有効活用すべきだろうな

「流石に人外と思わしきものにはある程度の補正を入れるぞ

我とて、能力をホイホイと上げて人生に贅沢をさせてやれるほどの神力は持ち合わせておらんのでな

済まないが、そういうことでお願いしたい

その言葉が逆にオレを悩ませる

どうするべきか：

それじゃあ、これはどうであろうか

東方 project 十六夜咲夜の

『時間操る程度の能力』

紅美鈴の

『氣を使う程度の能力』

どうだ？

「ちよつとまでよ…」

氣を使う程度の能力はそのまま使つて問題ない

ただ、時を操る程度の能力はある程度制約がかかる
流石にチートな能力だしな」

まあ想定済みだな

ちなみにその制約とは？

「うーん、これだと…時を止めている時、敵への干渉状態で時間を解くこと不可能

まあつまり時間を止めた状態で敵を殺すとかは無理つてことだ

あと、靈力、妖力などの代わりに減少するのは体力

まあこの程度か…」

意外に少ないのだな…

「このくらいしか出でこないからな、能力が能力だし…」

まあ、我とてそこまで厳格なわけではないからな」

ところで、聞き忘れていたが、転生先つてどこになるんだ？

「三国志という物語があるだろう？それの異世界

まあ所謂パラレルワールド…といつたところか」

三国志の i f 世界つてわけか？

「そゆことだ、そこでなんだが…」

そう言つた後神は指を鳴らし、2つの白と黒の箱を目の前に出した
「この中には白い箱には貴様が降臨する地が、黒い方には貴様が出会う武将が描かれた
くじだ

白い方は一つ

黒い方は三つ選んで引いてくれ

そうすれば後はこちらで処理する」

成る程な、その辺も気を使つてくれるわけか
ならば…：

先に白い方に手を突っ込む
すると…：

「ほう、あそこか…」

割と平穀がありそなところを選んだな」

暗くて見えないが神には見えたらしい

何処だろうか？ 正直全く予想ができない…

「それではもう一箱も引いてくれ…」

そう言われて手を突っ込む
すると

「フツ、ハハハハ!!

面白い組み合わせを選びおつた

これはなかなか乙なものだな」

面白い組み合わせ：気になるが教えてくれそういうもない

「それはそうだ！この段階で教えたら、貴様も我も面白みにかけるであろう
まあ、同意はするけど：不本意だな

「何、人生そんなもんだ

さて、これで貴様が転生する時に行う手続きは全て終了した

これから、転生するに至つて何か質問はあるか？」

ならば一つだけ問うておこうか

オレがその転生先の世界を：

どれだけレールが敷かれたストーリーがあつたとしても…：

ぶち壊して構わねえんだろうな?

「フフツ、ハハハハハ

これまた面白いことを言う!!

予想外の事象を度々起こしてくれるな! 貴様は!!
それなら我も餞別に一つだけ言つておこう

貴様の人生だ! 貴様の好きにすれば良いとな!!!」

その言葉を聞いた瞬間、オレの意識は徐々に薄れて行つた
輪廻転生の時に貴様がどの顔を引つさげて冥界へとくるか
楽しみにしておこう

という声を聞きながら…

三国志…前世でオレが読みに読みまくつた本だつたな
演義と、孔明を習つて孫子兵法や墨子とかも読んだっけ

武将では、周泰が一番好きだつたな

合肥の戦いでのあの大活躍は胸踊るものがあつたな

そんなことは置いといて取り敢えず、ほとんどのやつは自分の身を守るといった保守的な態度で転生すると思うがオレは違う

オレがやるべきこと…それは

世界を…思いつきりぶち壊してやることだ！

表章 一話 始まり

「父さん、母さん、いつてきまーす」

「気をつけろよー」

「いってらっしゃい」

俺の性は月、名は頃、真名は浩照（ひろてる）。六年前に神様転生で三国志時代の図州済陰郡のはずれの村に転生した。

生まれてからすぐに俺は『真名』というものをつけられた。その瞬間俺は何か違和感を感じた。だがそれもすぐに杞憂だと思った。たとえ神様でも死んだ人間を『ゲームの中の世界』へ送り込むことなど普通は不可能だからだ。

しかし世の中というものは不思議なもので、俺の産まれた一年後になるとある少女が産まれた。その時に俺は——ああ、この世界は三国志は三国志でも『真・恋姫無双』の三国志世界なのだな——と悟った。

歓喜した。理由といつても言葉にしたらただ元の世界がつまらなかつたとか二次元の世界に憧れていたとかそんなものなのだろうが自分の身体が、魂が、心がこの世界を

喜んでいる、祝福している、渴望しているようにも思える。

せつかくの二度目の人生だ。

原作通りに進ませるのもいいが、機会があればグチャグチャに引っ搔き回すのも——

「恋、迎えに来たぞ。早く行こうぜ」

「待つてた、行こう。照兄」

性は呂、名は布、真名は恋。三国志好きなら誰でも知り、崇め、恐怖する、天下無双の呂布奉先である。

俺の家の向かいに住んでいる、一歳年下のかわいいかわいい妹のような存在である。こんな少女が方天画戟を振り回して人を殺さなければならなくなるなんて、ほんとこの時代は終わつてやがる。

でも一つ不思議なのが原作ではここまで言葉を発することってあんま無かつた気がするが……まあ、育った環境によつて違うか。

「照兄、今日はどこいく？」

「そうだな……といつても広場か森かのもんだが、確かこの前東郡の方の村が襲われたつて行商人が話してたな。安全を考えて、しばらくは広場の方で遊ぼうか」

「わかつた。照兄、そこ右」

「おつとそつか、んー…やっぱここらへんは何回来ても迷つてくるな…」

「照兄は道を覚えることをしない」

「うるさいな、これでも努力してんのだって」

現代ではわからなくなつたらいつも携帯で調べてたからな、というかここだけは本当に意味わからんつて。

毎回通るたびになんか違う感じがあるし。まあそれもここら辺はあの子の爺さんである村長が住んでるしな。あの孫娘にだだ甘な爺さんはほんとめんどくさいよ。

まああの子はほんと天才だしな、でも毎回違うのにそれでも迷わずすんなりと目的地にたどり着くことができる恋つてーー

「雛里ー、来たぞー」

「雛里、また來た」

とてとてと、こきざみに床を歩く音が聞こえてくる。だんだんその音は大きくなつていくのだが、いかんせんこの家は広いので時間がかかるてしまう。

「浩兄様、恋さん、おはようございますっ

「ああ、おはよう雛里」

「雛里：おはよう」

性は鳳、名は統、真名は雛里。三国志の時代で『鳳雛』と呼ばれることになる天才軍師の片割れである。

「この村の村長の孫娘で、俺の二つ年下の女の子である。

恋と同じく俺の溺愛している妹のような存在である。

いま現在四歳でこんだけ頭が偉いんだから、原作始まるくらいには一体どんだけすごくなるんだよ。

「あわわ、二人ともそんな出会い頭に頭を撫でないでください！」

「まあまあ、そう言うなよ。そんで今日は広場に行こうと思うんだ」

「広場ですか、やはり浩兄様も陽平のうわさを知つていたんですね」

「まあ少しだけね」

陽平の村だったのか、行商人は東郡としか言つていなかつたがどこから情報が来てる
んだろう。謎だ：

「おお浩照に恋、今日も雛里をよろしくたのむぞよ」

「村長、おはようございます」

「おはよう」

「ああおはよう、二人ともいつもありがとうねえ」

「いえ、好きでやつてるんで」

「雛里といる、恋も楽しい」

「それはなりよりじや、ではもう行つてきなさい。時は金なり、じやよ」

「あわわ、わかりましたお爺様。いつてまいります」

「うむ、夕飯までには帰つてくるんじやよー」

村長との会話を終えた俺たちは、とりあえず広場へとやつて来た。広場には大抵他の家の子供たちが既に遊んでいる。

ラが濃いからなあ：

合う人とはものすごく合うのだが子供達に合うかといえば微妙なところもある。

もつとも俺はもう精神年齢でいえばもう二十一だしな：子供の遊びとか考えることとかそこまでわかんねえよ。

「浩兄様、今日はなにして遊びます？」

「そうだなー、三人じゃあできることも限られてくるしなー」

「照兄が決めたのならなんでもいい」

「わ、わたしもでしゅ」

「なんでもいいねえ：言われてみて一番困る答えだなあ…」

「あわわ、しゅみませんっ」

いや別に謝らんでもいいって。でもそうだな……昔やつた外での遊びというと鬼ごっこにかくれんぼにかんけり etc 全部やり尽くしたしなあ…：

「んー、そーだなー…」

俺が薄れかけていつている記憶を必死に呼び起こそうとしていると、村の端の方からがやがやと声が聞こえてきた。

「……なにかあつたようだな」

「そ、そうですね。嫌なことじやなければいいんですけど…」

「行つてみる」

「ああ、もしかしたら楽しいことかもしけねえぞ」

俺たちは走った。

村の外れまでは結構距離があつたので、俺と恋の全力は離里には辛かつたので途中から恋の背中に乗せた。

そして、村の境界に着いてみると30人くらいの難民が座つて炊き出しを食べていた。

周りの人聞いてみると、この難民たちはここより北にいったところの村の者たちで、村が賊に襲われて延々とさまよううちにここにたどり着いたらしい。

いま村長や幹部たちが難民たちの処遇について議論しているらしい。

俺としてはこの前村の南側で事故があつたからな……できれば迎え入れてほしいんもんだ。

……とはいえ賊に襲われたにしては男も半分くらい残つてるな、でもほとんどは足かどつかをケガしてるな……難儀なこつた

そんで子供がいるのは……あそここの夫婦だけか、賊に襲われたらしいし心の傷が少なかつたらいいんだが——

その子が、こちらを向いた：

感情の無いような瞳が……痛々しかつた

どこかで、見たことがあつた気がした：

ここではなく……いまは昔、元の世界の方で……

ふ
う
？
】